

親密であったが、*corpora incorrupta* の *anima* と *caro* の教義的説明があくまでも不明確である。その不明確なところを認めながら、中世の *corpora incorrupta* の特徴を詳しく見ると、古代・古代後期の神聖性と純粋性の印として説教的な意義を持っていた *corpora incorrupta* は、より理論的であった中世的身体論によって理解されるようになったことが明らかとなる。本発表は、聖人伝 (*vitae*) における *corpora incorrupta* の中世的思想を位置づける試みである。

corpora incorrupta の思想的背景は、本研究においても、個性を伝える肉が遺体に残ることは生きている人の内在と関連づけられる。*corpora incorrupta* の場合、聖人の *equilibrium* (体液の釣り合い) とともに、*caro* が *anima* の理想に沿うことによって肉は腐敗しない。*corpora incorrupta* の中世的文脈を見ると、中世的自然哲学における「身体」の理論が古代の教義的理想や神の奇跡が中心となっていた古代の *corpora incorrupta* よりも、*caro* がその聖人たちの「身体」の歴史を語る中世の自然哲学的な世界観と聖人の *vitae* を統一させるものとして、*corpora incorrupta* を理解することができる。

つまり、中世の *corpora incorrupta* は古代の *corpora incorrupta* と同様に神の恩恵の結果であると見なされたのだが、その *caro* を純粹にする道徳的恩恵は以前よりも理論的に説明されていた。その理論は古代の哲学まで遡ることができるが、中世において「体液」や「ミアズマ」などの概念が普遍的になり、そのものは自分の体に関わるもので、自己責任であるというのが一般的な概念となっていた。その背景において、中世の

corpora incorrupta は、*caro* の死後の行為が道徳的のみならず、「物理的に」に説明されていた時代における聖人や高級貴族とハンセン病者や罪人が理想の両極であった秩序の中に位置付けなければならない。中世の *corpora incorrupta* と個人救済論の形成史の中に位置付ける可能性と、中世の *corpora incorrupta* とノーブレスというような中世社会観・宇宙観的概念の関連性について、先行研究よりさらに明確にするのが本研究の目的である。

対抗言説としての Conspiracy Theory

辻 隆太郎

現代に広く流通している陰謀論の大多数は、一定のフォーマットに則っている。それは、近代への移行期にあるヨーロッパにおいて、旧秩序の擁護者たちによって生み出された、当時の社会変化への対抗言説であった。

ユダヤ陰謀論は、フランス革命からロシア革命にかけての一世紀のあいだにヨーロッパとアメリカに広まった。その基盤は、迫害の歴史を通して形成されたステレオタイプな「ユダヤ人」イメージと、近代移行期に発生した新たな反ユダヤ感情だった。すなわち社会の内部に潜む邪悪な異教徒、ずる賢く利己的な金の亡者、忠誠心のない「国際主義者」。そして既存秩序を破壊する近代主義の象徴としてのユダヤ人である。

ユダヤ陰謀論の代表的文書『シオン賢者の議定書』の記述には、一般大衆への侮蔑、自由や平等といった新しい価値観への嫌悪、古きよき秩序と道徳の理想化、社会変化に対する旧体制

からの反動、自由主義的潮流に対する嫌悪感が、如実に現われている。

フランス革命をフリーメイソンの陰謀に帰する主張から発展したフリーメイソン陰謀論も、ユダヤ陰謀論と同様の構造を持っている。革命の混乱は、旧来の秩序に満足している人々にはもちろん、そうでない人々にとっても、受け容れがたいものだっただろう。フリーメイソン陰謀論はこの混乱の「理由」と「敵」を明確に説明することで、人々にとって「理解」できるものに秩序立てた、ということができる。

比較的進歩的な知識人が集まったフリーメイソンは、ユダヤ人と共に近代の象徴となりえた。旧来の秩序を支持する人々が、彼らにとつて受け入れがたい社会変化と、その変化を象徴する存在たるユダヤ人およびフリーメイソンを同一視した結果生み出されたものが、ユダヤ陰謀論とフリーメイソン陰謀論である。

こうした陰謀論のフォーマットは、現代アメリカにおける、保守的キリスト教信仰に基づいた陰謀論に受け継がれている。それらはキリスト教を文明や秩序そのものと前提し、共産主義、無神論、リベラリズム、国際主義などを陰謀の産物として糾弾。伝統的秩序の擁護と国家、民族、人種の誇りや純粋性を訴え、古きよき「アメリカ」の防衛を主張する。

現代の陰謀論は、陰謀によって世界統一政府すなわち「新世界秩序」が目論まれていると主張する点から、新世界秩序陰謀論と呼ばれる。過去の陰謀論と比較してのその特徴は、第一に様々な陰謀を統合した巨大で複雑な陰謀のネットワークが想定

されている点、第二には世界が既に、ほとんど陰謀に支配されきっているとする点である。これらの特徴はグローバリゼーションの産物であり、その鏡像であるように思われる。複雑な陰謀のネットワークは、国家に限らず様々な政治主体が絡み合い不確実性を増す国際社会の情勢を反映している。また、上記の陰謀ネットワークが結局は統一された陰謀の意思によって動かされていること、および世界が陰謀に支配されきっているという想定は、自立性を増す社会システムに埋没し受動的存在に置かれる自己、「我々」ではない誰かが世界を動かしているという感覚、にもかかわらずその「誰か」の姿が見えないという事態において、世界を動かす主体を可視化する、世界を統一的に簡単に理解したいという欲求に応えるものだと思われる。

いったん成立したフォーマットは、換骨奪胎されつつ、その形式や内包された価値観を保持したまま、現代の陰謀論言説に受け継がれている。それは、社会変化の理由と責任を邪悪な陰謀に帰し、自己を正当化しつつ、認めがたい社会変化を説明可能とするための解釈枠組である。

共同体の紐帯

——イバード派イスラム思想におけるワラーヤの概念——

近藤 洋平

宗教における信仰は、個人の内的経験にとどまるものではなく、同じ信仰を持つ人間同士を連帯させ、一つのまとまった共同体を成立させる働きを持つ。この宗教共同体は、所属する構成員に帰属感覚とアイデンティティの基礎を与えるが、共同体